

自己評価報告書(最終報告)

報告者

人間形成コース／梶井 一暁

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教育大学教員としての授業実践

大学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれている必要がある。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

- ①教育実践力を単なる教室内での教授スキルの能力に偏らない観点から把握し、教員資質として地域理解や情操を重視した体験的・交流的な授業を設計する。
- ②教育史の授業において、歴史的な観点から批判的に教育実践をとらえなおす手法を提示し、現在の教育実践を相対化する視座の形成に努める。
- ③国際的な視野の涵養のため、留学生との交流や対話を導入した授業を実施する。

2. 点検・評価

- ①地域に共感的なまなざしを向けることのできる教員を育成するため、高島や神山の歴史資料を実地にたずね、地域に伝存する資料をまもる住民の意識や行政の仕組みに気づかせられるように指導した。
- ②大学院「人間形成文化史研究」「近代教育文化演習」で学生自身の過去を省察し、その教育経験が21世紀初頭現在の一部を形成する要素となっているというプロセスの意識を涵養することに努めた。
- ③学部「人間形成原論」「学校と人間形成」で学生と留学生が交流したり議論したりする時間を設定し、とくに中国と日本の文化的・歴史的な基盤に対する理解が深まるように努工夫した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ①前年度にひきつづき、学生の理解度と関心の所在を把握して授業を進めることに努め、授業に対する意見や質問を記すカードを作成し、授業ごとに学生に配布し、次回の授業で応答する。授業改善のための資料としても役立つ。
- ②学生の主体的・実践的な学習行為を引き出すため、フィールド体験を取り入れた授業実践を試みる。
- ③学生の進路相談に積極的に応じ、とくに教員採用試験対策の指導を行う。

2. 点検・評価

- ①学部「学校と人間形成」、大学院「人間形成文化史研究」で授業に対する意見や質問を記すカードを作成し、学生の理解や関心を把握するために活用した。
- ②学部「地域社会研究」、大学院「四国遍路と地域文化」で学生の遍路歩き体験授業を実施した。今年度からの取組として、実地体験後の振り返りの授業も設定し、体験の自覚化と省察を図った。学部「地域社会研究」は四国コンソーシアム授業としても提供し、講義のデジタル・コンテンツ化に資した。
- ③学生に対して教員採用試験対策（とくに模擬面接・論説文添削）の個別指導を行い、徳島県、大阪府、福岡市、堺市などでの合格者を出した。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

- ①教育と宗教に関する研究を進め、学会や研究会で報告し、論文にまとめる。
- ②学内外の研究助成の公募に積極的に申請し、とくに学外資金の調達に重点をおく。
- ③科学研究費補助金・基盤研究C「国語史資料・学習史資料開発のための近世地方寺院伝存文献の調査研究」の研究分担者として、教育史の観点から徳島県や香川県の寺院所蔵資料を調査研究する。
- ④海外の教育学研究の成果を検討し、優れた著作の翻訳作業を進める。

2. 点検・評価

- ①寺院の教育史的研究を進め、研究論文が日本宗教学会編『宗教研究』85に掲載された。
- ②教育研究支援プロジェクトに採択された四国遍路の研究について、その成果の一部を日本仏教教育学会（於大谷大学）で発表し、取組を広く知らせた。
- ③科学研究費補助金「国語史資料・学習史資料開発のための近世地方寺院伝存文献の調査研究」について原教授と共同で進め、岐阜県や新潟県の寺院で一次資料の調査・収集を行った。
- ④イギリス教育史家のRoy Lowe教授の著書の翻訳を進め、草稿ができた。同教授からメールで指導を受けるとともに、イギリスに赴き、直接指導も得た。次年度中の刊行予定である。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①大学院入試委員会委員などとして、大学運営に貢献する。
- ②地域連携センターの外国人客員研究員との調査研究をプロジェクトメンバーとして遂行する。

2. 点検・評価

- ①大学院入試委員、創立30周年記念誌刊行委員などとして大学の運営・発展に貢献した。
- ②地域連携センターの外国人客員研究員と協力し、学内外で計3回の研究セミナーを開催し、教育思想・歴史に関する調査研究成果を公開した。
- ③教員免許更新講習会講師をつとめ、教師教育者としての責務を果たした。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①地域の学校教員と連携し、地域の文化や伝統による人間形成作用に関する共同研究を進める。
- ②報道機関の教育文化事業に協力し、新聞の教育欄への記事提供を行う。
- ③外国人留学生の研究指導を行う。

2. 点検・評価

- ①相生中学校と連携し、四国遍路歩きに関する実践研究を行った。鶴林寺から葉王寺まで約43kmを本学学生が中学生を引率して歩き、遍路体験が中学生に及ぼす情操的意味を考察した。
- ②岐阜新聞の「中学生の広場」に教育記事5本を提供し、啓蒙活動に貢献した。
- ③修士課程の外国人留学生2人を指導し、論述能力の向上を図った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

- ①四国遍路歩きに関する教育実践について、徳島新聞や読売新聞の取材を受け、取組の広報に資した。とくに読売新聞は本社からの再取材があり、全国版(夕刊2012年1月18日付)で紹介された。
- ②FMラジオのキャンパス・リンク徳島に出演し(大石教授、町田准教授とともに)、本学の魅力の発信に最大限努めた。
- ③四国女性研究者フォーラム(於愛媛大学)で本学選出パネリストとして参加し、男女共同参画社会の実現に向けた大学教育研究環境の改善について発表した。